在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒に関連する視覚史料のデータベース化事業

駒井義昭
石井隆憲
三沢伸生

1．はじめに：研究の進展

近年，日本および海外の学界において，近代史におけるトルコ（タタール）系イスラーム教徒の存在が注目を集めている。彼らは旧ソ連における民族・宗教的マイノリティーとして弾圧・差別を受けるなかで，民族的・宗教的ナショナリズムに目覚め，欧米のみならず日本を含めたアジアをも巻き込み，広範囲にわたるネットワークを構築しながら世界規模で活動を展開していった。その活動は彼らの活動だけに留まらず，彼らがときに連携，ときに利用を模索した現地の様々な勢力を巻き込んでいった。近代日本においては，彼らは大アジア主義思想を抱く活動家や，軍部や政府の一部が模索していた「回教政策」との接触を図り，その結果として近代日本の思想・政策にも大きな影響を与えたのである。彼らの活動を解明することは，近代日本史を別角度から解明することにもつながってくるのである。

こうしたなかで，日本で注目すべき研究を展開しているのが，アブデュルレシト・イブラヒムの足跡を丹念に解きほぐす小松久男（小松 2009），ロシア語史料を用いて戦前期の在日タタール人コミュニティの中核を担ったクルバンガリー（クルバンガリエフ）を研究する西山克典（西山 2006），そしてクルバンガリーとアヤズ・イスハキーの対立を解明する松長昭（松長 1999，2008，2009）らである。

一方，海外の学界では，タタール系トルコ人とこの分野の草分け的研究者であるナーディル・デヴレト（DEVLET 2005），ロシアにおけるアブデュルレシト・イブラヒムの活動を研究するトルコ人研究者のイブラヒム・トゥルクオウル（TÜRKOĞLU 1997），戦前期の在日タタール人研究を行うトルコ人研究者のメルトハン・デュンダル（DÜNDAR 2006，2008，DÜNDAR & MISAWA 2010），ロシア在住のタタール人として精力的に研究を進めるラリサ・ウサマノヴァ（USMANOVA 2007）らがあげられる。

2．視覚史料の発掘・収集

前述のような国内外の研究者たちは，それぞれに日本・トルコ・ロシアさらには欧米諸国において，公文書史料，私文書史料（書簡，日記，覚書など），叙述史料（図書・雑誌・パンフレットなど），さらに写真・絵葉書などの視覚史料を発掘・収集・分析している。

こうした国内外学界の研究状況の中で，本プロジェクトにおいても，日本およびトルコにおいて史料の探索・収集にあたった。

これらのなかで視覚史料は，その被写体の同定など難しい分析があるにせよ，日本におけるトルコ（タタール）系イスラーム教徒に関する具体的なイメージを与える貴重な史料である。近年の映像人類学の進展を見るまでもなく，失われやすい視覚史料を収集・分析してデータベースを構築していくことは研究の推進にとって極めて重要である。そこで本稿では，本プロ

ジェクトが企画・準備している収集・分析した視覚史料の一端を紹介しながら，その重要性を喚起するものである。

本プロジェクト代表である，三沢は2009年度東洋大学長期在外研究によって１年間イスタンブルにおいて研究を推進した。この間に各種研究機関において諸史料の探索・分析を行うとともに，現地の古書店・古美術骨董商店・美術品競売さらにはネット・オークションにおいて埋没した史料の収集にあたった。

そのなかでも以下の４点のまとまった史料群が重要である。

A）戦前期の在日トルコ（タタール）系家族の写真アルバム【写真１～６】

イスタンブルの骨董古物収集家から入手したもの。残念ながら当該史料の入手経路は明らかではなく，アルバムの持ち主の個人情報は不明である。

アルバムには約300点の写真が所収され，その内容から，戦前期の日本および朝鮮半島において撮影されたものと考えられる。

アヤズ・イスハキーが被写体となっている写真が複数見出され，このことからイスハキーの朝鮮半島におけるイディル・ウラル・タタール文化協会に関わった人物がアルバムの所有者ではないかと推測される。

また東京のレストランとおぼしき場所で大勢の在日トルコ（タタール）人とともに，大久保幸次が写っている写真も見られ，東京における彼らの活動の記録としても貴重である。

後半には下記の３と同じく満洲・朝鮮半島の絵葉書（投函済みのものか？）が貼付されている。これら日本の旧植民地にはソ連から逃亡してきたトルコ（タタール）人たちが構築したネットワークの存在しており，そのネットワーク間の移動に際して投函されたものと思われる。

B）イディル・ウラル・タタール文化協会の集合写真【写真７】

上記のＡと同時にイスタンブルの骨董古物収集家から入手したもの。アルバム所有者のものかどうかは不明。

東京もしくは朝鮮半島におけるイディル・ウラル・タタール協会の何かの際の集合写真で，イスハキーが確認される。

C）在日トルコ（タタール）系家族投函の絵葉書類【写真８】

上記のＡと同時にイスタンブルの骨董古物収集家から入手したもの。約30点。アルバム所有者のものかどうかは不明。元はアルバムに貼られていたものが剥がされたため，文面に判読不可能なものがある。

絵葉書はＡの貼付されたものと異なり，日本国内の名所風景や日本女性など日本的なものである。

D）トルコ海軍大将シェレフ・カラプナルの個人アルバム類【写真９～10】

日本とトルコとの間に国交が結ばれたことにより，1935年から38年までの間，日本海軍に２名のトルコ海軍士官が教育・訓練目的で日本に駐在した。ゼキ・エンヴェル（・バヤット）（Zeki ENVER BAYAT）海軍少佐とシェレフ・カラプナル（Şeref KARAPINAR）海軍大尉（階級は当時のもの）とである。彼らは日本語を習得しつつ，海軍士官学校において日本の海軍技術を学んだ。(1)

カラプナル大尉は，その後，アメリカにも派遣され，海軍大将まで昇格した後，退役した。退役後にトルコに進出する日本企業の相談役を務めるなどして，日本＝トルコ関係に大いに貢献した。

2006年，カラプナル大将が没した後，その個

人アルバム類がトルコの古美術骨董商店・古書店に流出した。

その全てではないが，アルバム１冊と写真数点を入手した。販売形態としてまとまった形で売りに出されておらず，その後もあちこちで部分的に見かけことから，残念ながらコレクションは散逸してしまい，その全体量は把握することはもはや不可能になってしまった。

上記のアルバムには海軍士官学校の模様から，日本国内の旅行，海軍関係者との交流をうかがうことができる。日本側の史料に基づいて，人物の特定や関連する補完史料の探索を行うことが急務の課題である。

上記のように研究代表者である三沢の収集した史料のほかに，研究分担者の駒井は，日本に渡来した南蛮文化文物に関して視覚史料を徹底的に精査している。

先行研究（駒井・三沢　2006）において明らかにしたように，南蛮文化文物は，トルコをはじめイスラーム関係の情報を見出すことが可能である。従来までの日本の美術研究では，ほとんど顧みられてこなかった，こうした視覚史料を一括してデータベース化していくことを企画している。

また研究分担者の石井は，戦後直後に日本で活躍した在日トルコ（タタール）系格闘技選手の研究（石井・三沢　2010）を契機に，彼らに関連する視覚史料を探索している。

こうした選手の中で抜きんでて著名な選手は，ユセフ・トルコである。量としてはあまり多いものではないが，戦後のスポーツ関連の書籍・雑誌・新聞においてユセフに関するものを収集することは可能である。そこで探索・複写収集を進めているユセフ関連写真のなかから，そのほかの在日トルコ（タタール）系格闘技選手の特定作業を試みている。

３．史料のデータベース化事業の展開

近年，IT 技術の進歩にともない，歴史学をはじめとして人文社会科学系の諸分野において，書籍・文書・視覚史料の高密度スキャンと，サーバを利用した一般公開あるいは限定公開のデータベース構築や，さらにCD-ROMやDVDといった外部記憶媒体による配布によるデータの共有化事業が試みられている。この現象は日本のみならず国際的な規模で様々に行われてきている。

日本におけるイスラーム研究分野においても様々なデータベースが構築され，資料集が刊行されてきた。(2)また本プロジェクト研究代表の三沢は，東洋大学の研究プロジェクトを通してそのノウハウを習得しつつ，学内外で様々なデータベース構築事業に参画し，学内において，オスマン語（＝アラビア文字表記の古典トルコ語）逐次刊行物のDVD史料集，また本プロジェクトにおいても在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒が東京で印刷・刊行したアラビア文字表記のタタール語刊行物に関して，2010年度にDVD史料集を刊行した。(3)いずれも叙述史料のデータベース化史料集であったが，寄贈先である国内外の研究機関・研究者たちの関心を大きく喚起することができた。

４．おわりに：視覚史料データベース化へ

こうした史料のデータベース化事業の重要性が周知されるようになった現在，本稿で紹介してきた本プロジェクトによって収集された様々な史料，とりわけ視覚史料を分析・研究に留まらせずに，さらなる研究の進展を目的としてデータベースとすべく準備中である。

視覚史料の場合，文書や文献史料と異なり，被写体の場所・年代・撮影場所・建造物・人物などの様々な情報を特定することが必要である。同時にそうした特定作業には関係者からの証言が不可欠である。在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒のように，その関係者の多くが物故あるいは高齢に達している現在，特定作業を進めるためにも，データベースを構築して広く周知し情報を収集することが急務であ

る。(4)

この点を鑑みて，本プロジェクトは従前のような文献史料データベースと並行して視覚史料データベース化事業に向けて準備を進めている。

もちろん資料の公開にあたっては著作権・肖像権保護も考慮すべきであり，東京外国語大学の研究プロジェクト史資料ハブにならって公開の形式・形態をプロジェクト・メンバーとして協議中である。

※本稿は，東洋大学学術推進センター・研究所プロジェクト研究研究助成金に基づく，研究課題「近代日本におけるトルコ（タタール）系イスラーム教徒にかんする基礎的研究」【拠点：東洋大学アジア文化研究所，研究代表者：三沢伸生，平成20～22年度】の研究成果の一部である。

＜参考文献＞

［日本語文献］

＊石井隆憲・三沢伸生　2010.「戦後日本におけるトルコ（タタール）系格闘技選手に関する覚書」『アジア文化研究所研究年報』44，335－340頁。

＊臼杵陽　2010.『大川周明―イスラームと天皇のはざまで』青土社。

＊大澤広嗣　2004.「昭和前期におけるイスラーム研究―回教圏研究所と大久保幸次―」『宗教研究』78－2，493－516頁。

＊駒井義昭・三沢伸生　2006.「南蛮屏風に描かれたイスラーム世界―ヨーロッパ文明を媒介として日本に流入したイスラーム文明像―」『アジア文化研究所研究年報』40，179－188頁。

＊小松久男　2009.『イブラヒム，日本への旅―ロシア・オスマン帝国・日本』校倉書房。

＊店田廣文　2006.「戦中期日本における回教研究―大日本回教協会寄託資料』の分析を中心に―」『社会学年誌』47，117－131頁。

＊西山克典　2006.「クルバンガリー追尋―国際情勢に待機して―」（1）・（2）『国際関係・比較文化研究』4：2，325－350，5：1，93－109頁。

＊日本学術振興会科学研究費基盤研究「日本・イスラーム関係のデータベース構築」＆早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室（編）2006.『CD-ROM 大日本海峡協会関係写真資料』東京：日本学術振興会科学研究費基盤研究「日本・イスラーム関係のデータベース構築」（日本女子大学）。

＊松長昭　1999.「アヤズ・イスハキーと極東のタタール人コミュニティー」『近代日本とトルコ世界』（池井優・坂本勉：編）頸草書房，219－263頁。

＊―――2008.「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」『日中戦争とイスラーム』（坂本勉：編著）慶應義塾大学出版会，179－132頁。

＊―――2009.『在日タタール人－歴史に翻弄されてきたイスラーム教徒たち－』東洋書店。

［トルコ語・欧米語］

＊ “A Basıc Study of the Computarızatıon Process of the Texts ın the Asıan Language” Project, suppoted by TOYO University 2008. *DVD Sırat-ı Müstakim & Sebiürreşad, Ver.1*, Tokyo : TOYO Unıversity.

＊ “Construcing Database for Relations between Japan and Islam” Project, supported by JSPS [No.17201050] & Media Center, University of Shimane 2008. *DVD Photography Collection of Milli Bayrak (Mukden, 1935-1945), Ver.1*, Tokyo : “Construcing Database for Relations between Japan and Islam” Project (Japan Women's University).

＊ DEVLET, Nadir 2005. *Yırak Könöıgıştagı tatar-başkortlarga nı buldu*, Kazan.

＊ DÜNDAR, Ali Merthan 2006. *Panislamizm'den Büyük Asyacılığa : Osmanlı İmparatorluğu, Japonya ve Orta Asya*. İstanbul : Ötüken.

＊―――2008. *Japonya'da Türk izleri : bir kültür mirası olarak Mançurya ve Japonya Türk-Tatar camileri*, Ankara. : Vadi Yayınları.

＊ DÜNDAR, Ali Merthan & MISAWA, Nobuo

2010. *Books in Tatar-Turkish printed by Tokyo'da Matbaa-i İslamiye (1930–38)* [*DVD ed. Ver.1*], Tokyo : ACRI, Toyo University.

* KOSUGI, Yasusi et al (eds.) 2003. *CD-ROM Al-Manar*, 5 vols., Kyoto : COE-ASAFAS, Kyoto University.

* TÜRKOĞLU, İsmail 1997. *Sibiryalı Meşhur Seyyah Abdürreşid İbrahim*, Ankara : TDV Yayınları.

* USMANOVA, Larisa 2007. *The Türk-Tatar Dıaspora ın Northeast Asıa*, Tokyo : Rakuda-sha.

<註>

(1) 一方，ゼキ・エンヴェル（・バヤット）少佐の個人写真については判明していない。ゼキ少佐は本邦初のトルコ語会話教本の共同執筆者として知られる（米澤隆輔＆ゼキ・バヤット『土耳其語會話』東京：三才社，1938年）。同書の序を記す飯村穣陸軍大将は，1930から1932年までイスタンブルの日本大使館（当時の大使館はアンカラではなくイスタンブル）に駐在武官として勤務した経験を有する。また，両名は北海道をはじめ様々に国内旅行をする一方，1937年にトルコ大使館の主導によって新装改築された和歌山県大島村のエルトゥールル号慰霊碑の除幕式においてトルコ海軍代表として出席，献花をしている。

(2) 日本のイスラーム研究の分野におけるこうしたデータベース化事業の草分けは，京都大学のCOEプロジェクトして実施・刊行されたアラビア語の逐次刊行物Al-ManarのCD-ROM版（KOSUGI et al 2003）である。その後，日本女子大学の臼杵陽教授，早稲田大学の店田廣文教授などが中心になって，（日本学術振興会科学研究費基盤研究「日本・イスラーム関係のデータベース構築」＆早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室（編）2006）や（"Construcing Database for Relations between Japan and Islam" Project, supported by JSPS [No.17201050] & Media Center, University of Shimane 2008）といったCD-ROM史料集，DVD史料集が制作された。とりわけ後者は島根県立大学メディア・センターと共同で，同センターに保管される，故・服部四郎教授の個人コレクションになる戦前期に満洲の奉天で，イスハキーらによって刊行されていた日刊タタール語新聞の*Milli Bayrak*に掲載される写真を所収するものである。新聞本体ではないが，戦前期の在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒を知る上で第一級の史料集である。

(3) ("A basıc Study of the Computarızatıon Process of the Texts ın the Asıan Language" Project, suppoted by TOYO Unıversıty 2008)，(DÜNDAR & MISAWA 2010)。前者は本プロジェクト研究代表者の三沢が中心になって初の試みとして実験的に制作したもので，色々と不備があり，機会があれば，修正したVer.2を制作する予定である。

(4) トルコ人研究者であるデュンダル准教授，テュルクオウル准教授もそれぞれに，在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒の個人アルバムを数点づつ所有されており，本プロジェクトが企画する視覚史料データベースに強い関心を示されている。さらにはそれぞれの所有するアルバム，写真などの被写体すなわち人物・建物・場所などについて共同で特定作業を進めていく予定である。

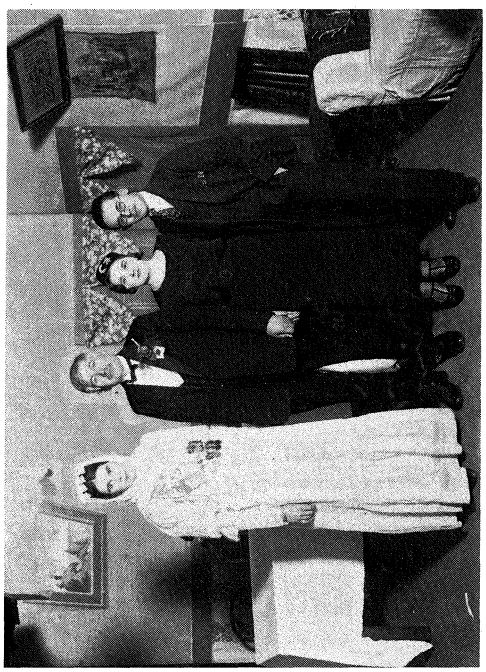

写真２：結婚式か？（中央の男性がイスハキー）

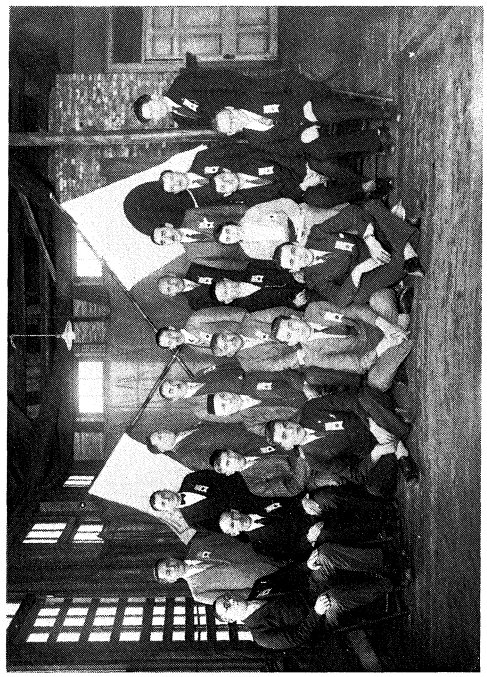

写真４：イディル・ウラル・タタール文化協会集合写真？

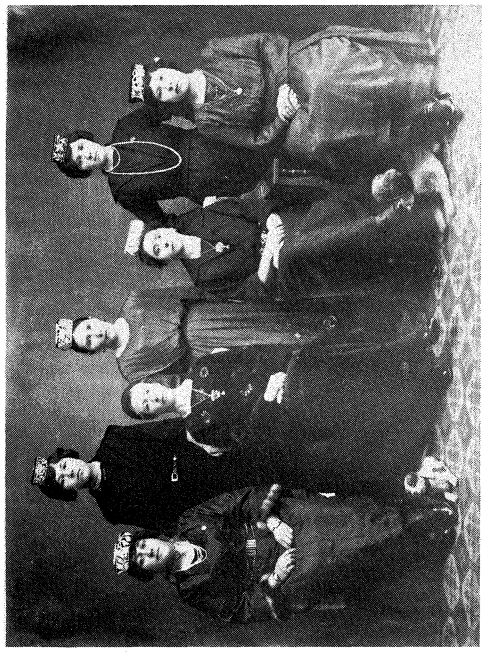

写真１：女性たち

写真３：中央の男性がイスハキー

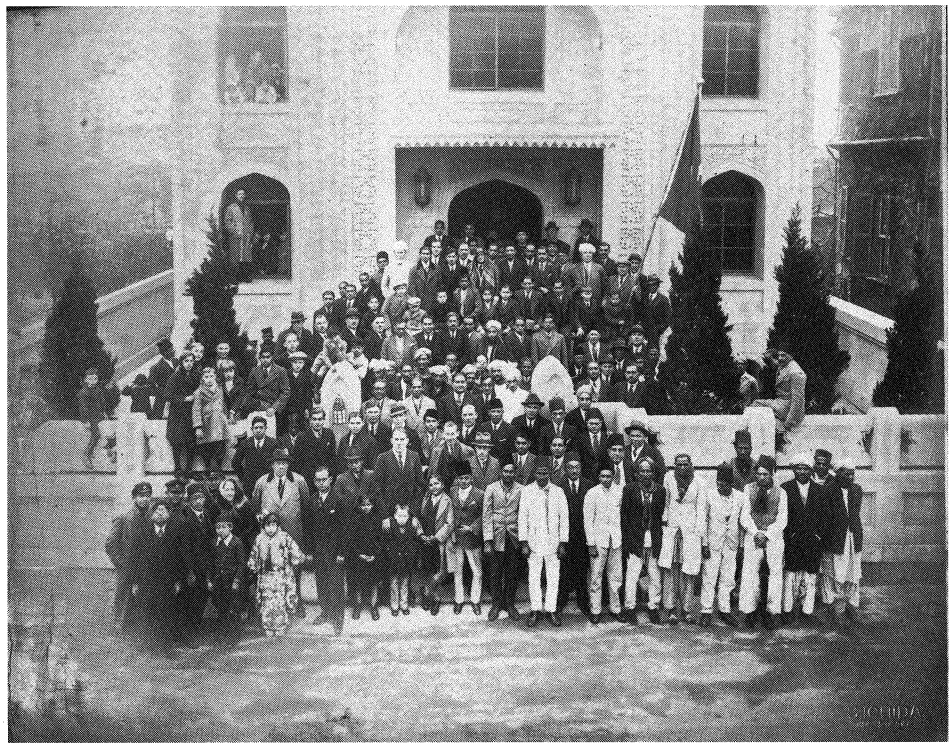

写真５：東京回教堂（東京モスク）開堂式（1938年）における集合写真

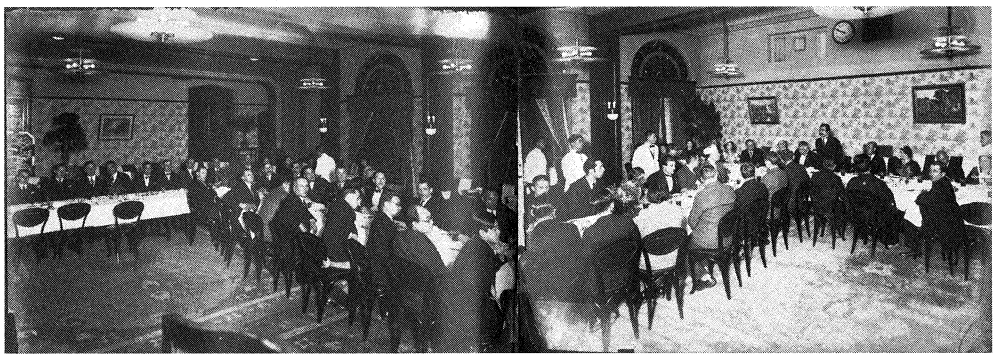

写真６：不詳年の不詳会場（おそらくは東京のレストラン）における
在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒と日本人との集会か

写真右側で一人立って話をしているのが大久保幸次

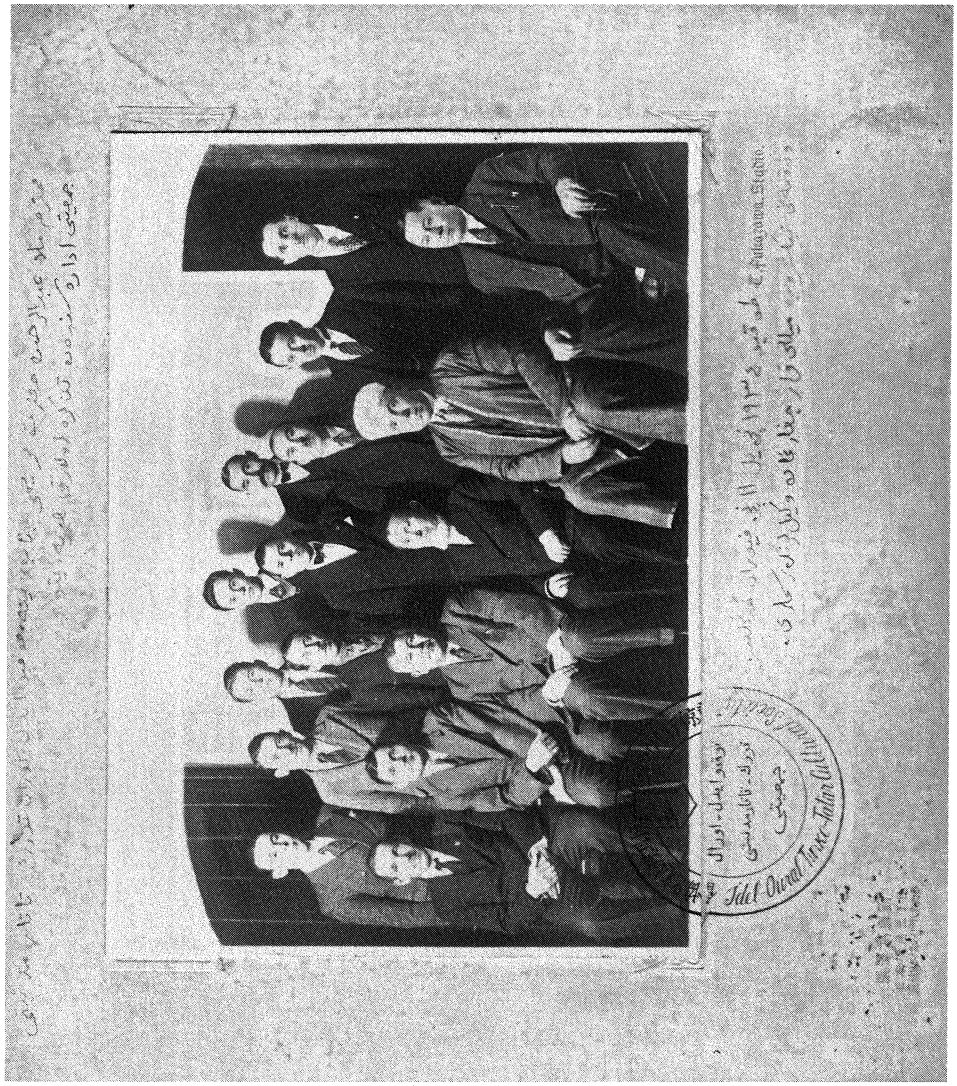

写真７：イディル・ウラル・タタール文化協会の集合写真
（大判：協会の公印押印）

前列左から３番目がイスハキー

写真８：在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒の投函した絵葉書（表面／裏面）

写真９：海軍士官学校におけるゼキ少佐（左）とシェレフ・カラプナル大尉（右）

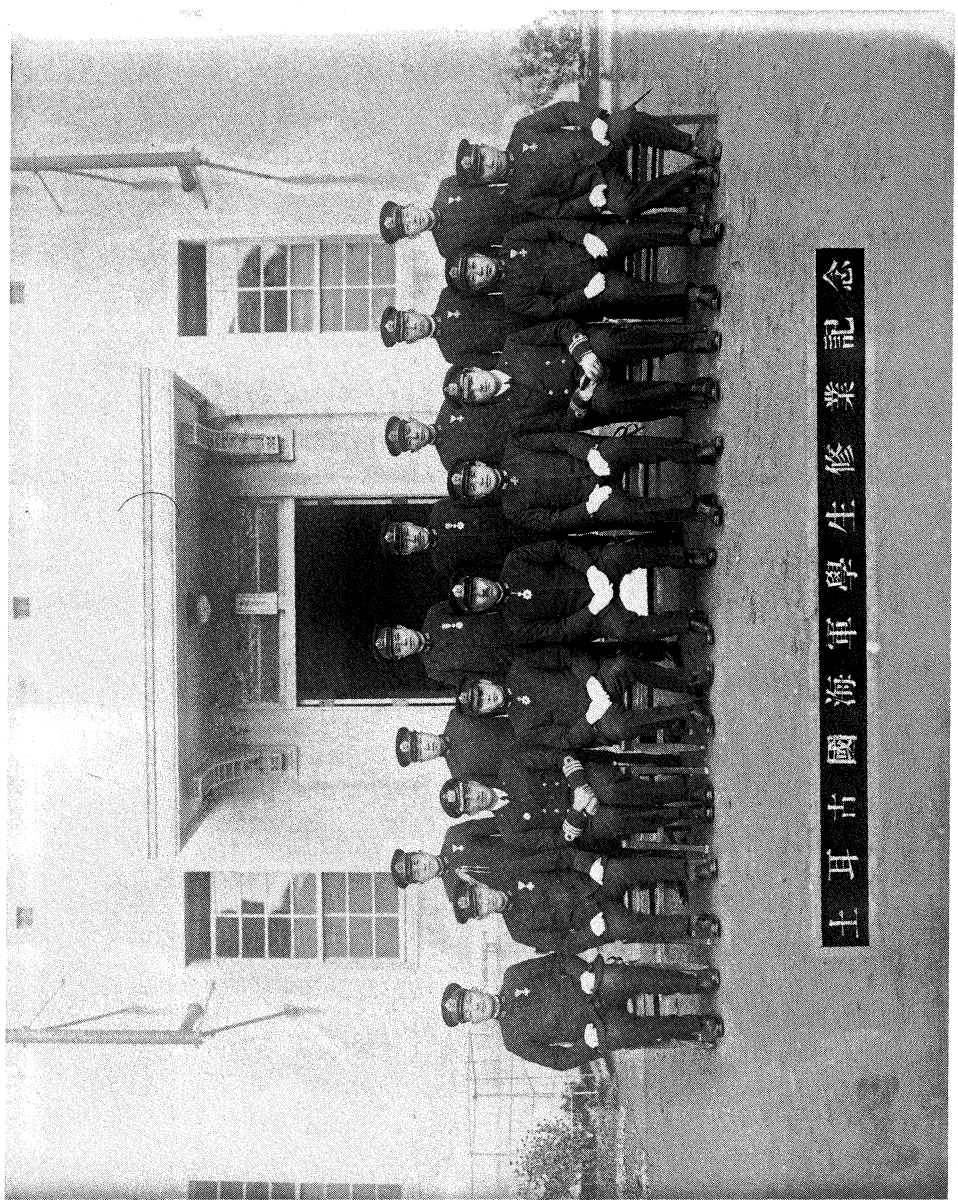

写真10：トルコ海軍学生修業記念写真（1938年？） 大判

前列左より，國府田教官，関教官，ゼキ少佐，岸教頭，小池校長，
梶岡春日艦長，シェレフ大尉，加賀山教官，北村副官
後列左より，小田切教官，杉浦教官，木村教官，光井教官，
植村教官，魚住教官，藪富教官